



田中 広幸 | GUP-py *Hiroyuki Tanaka | GUP-py*

紙の形態学 *Paper Morphology*

2021 2/17 (水) — 27 (土)

PM 12 — 7 (Last day ~ PM5)

休廊 日・月・火曜 *close : Sun, Mon, Tue.*

人は言葉を聞き、話し、読み、記します。そして言葉を用いて自らの考えを組み立てます。ところが言葉は一旦その人から離れると、響きと形をもったモノとなって受け手との間に存在する媒体となり、その解釈はすべて受け手に委ねられることになります。その結果、言葉は時に人の思いに背きもしますが、一方では意図を越えた思わぬ果実をもたらしてくれることもあります。言葉には不思議な決定不能性があります。誰彼の所有を離れた言葉は、閉じられた本の頁で眠りにつき、開かれた頁で目覚め、人々の脳裏でメタモルフォーゼを繰り返します。

本にも気持ちがあるならば、本を作る人の意思に束縛されずに鳥のように自由に飛びたいのではなかろうか。本の願いを叶えるため、本に鳥の形態を与えてみた。

鳥になった本は群れて、一つの風景を生み出す。

夏に訪れたドイツ北方の海に浮かぶ小島ホーゲは鳥まみれだった。美しい自然は鳥たちのパラダイス。どこに行っても大気中には何層にも重なった鳥の鳴き声が充満している。広い空と海、野に咲き乱れる野草のある光景を本の群に投影して、画廊の空間にホーゲの光景を浮かび上がらせたい。

本プロジェクトは Stiftung Kunstfonds 20/21 NEUSTART KULTUR の助成を受けています。



GUP-py (グッピー) こと畑洋子は、ベルリンで暮らし始めて 25 年。日常的な光景をグラフィック、映像、空間インスタレーションなど、様々なメディアを用いてファンタジックに表現した作品を制作しています。

田中広幸は、古書を素材にした作品をつくる美術家です。形態あるいは物質としての文字の属性に関心を持つ田中の作品は、文字は意味を媒介する手段であるという私たちの思い込みを静かに揺さぶります。

今回は、本を接点に、展示空間の上部に GUP-py の鳥、下部に田中の地衣類が共存することで一つの生態系(環境)を表現します。

本展は昨年 6 月に予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大により延期され、本年 2 月の開催となりました。

+1art カワラギ



田中 広幸

「言葉」「文字」をテーマに、古書を素材としたオブジェやインスタレーションの制作に取り組む。2013 年『夏の思い出森の夢』ヤマザキマザック美術館(名古屋)、『田中広幸 古書籍から繰り展げられるコトバと文字の世界』伊丹市立工芸センター、2015 年『岐阜おおがきピエンナーレ』I AMAS、『こだまの遠近法 田中広幸 野口ちとせ』+1 art(大阪)、2019 年『俳句 × 美術/伊賀上野』旧崇廣堂、2020 年『箕面の森アートウォーク』箕面国定公園、ほか個展など多数。



GUP-py (畑 洋子)

1995 年ベルリンにて GUP-py (グッピー) の名で創作活動を開始。ドイツと日本を中心に活動。日常的な光景をわずかにずらして生み出すミニマルなファンタジー世界を、グラフィック、写真、映像、アーティストブック、オブジェ、空間インスタレーションなど、多彩なメディアを用いて表現。代表作に、擬態語の文字アニメーション『はちみつ生物』『蜜族館』、人の旅行願望を起こす、目に見えない職業犬を描く『旅行犬』シリーズ、『飛びたがっている本たち』など。www.gup-py.com